様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ９ 月　 ９ 日現在

機関番号：３７６０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ０２８５２

研究課題名（和文）古代日本における地域社会への文字文化の伝播と識字に関する研究

研究課題名（英文）A study on the spread of literate culture to regional society and literacy in ancient Japan

研究代表者
柴田　博子（Shibata, Hiroko）

宮崎産業経営大学・法学部・教授

研究者番号：２０２１６０１３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：九州南部の墨書土器・硯・転用硯を集成するとともに、古代地域社会における文字文化の伝播を検討した。西海道諸国では、先進的な文物・文化は大宰府から伝えられると考えられてきているが、奈良時代に瀬戸内地域から直接持ち込まれた陶硯が出土するなど、文字文化の伝播ルートが複数であることが確認できた。古代末期の墨書陶磁器の広がりについても、博多経由がメインルートであるものの、奄美諸島における出土例から、中国南部からの直接的な流入も想定できた。また古代の国府跡では膨大な転用硯を確認し、文字を使った活動が活発であったことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
古代の九州において、文字文化にかかわる文物が大宰府を経由せず、あるいは博多を経由せずに、地域に入っている事例があることを確認した。メインルートが大宰府や博多ルートであることは変わらないが、地域への文字文化の広がりを複数の路線で検討する必要性のあることを明らかにした。また歴史学では資料の集成自体が重要な基礎研究である。本研究では、これまで行なってきた日向国・薩摩国・大隅国の出土文字資料集成を継続・追加し、冊子体に製本・印刷して学界関係者へ配付し、成果を広く活用できるようにした。

研究成果の概要（英文）：'Bokusho-doki'(pottery with ink inscriptions), ink slab and 'ten-yoken' (dish-diverted pottery ink slab) excaveted in southern Kyushu were integrated, and the spread of literate culture in the ancient regional society was examined in this study.It has been believed that the latest things and culture were brought to Saikaido region from Dazaifu, the political center of Kyushu of the days.However,'to-ken'excaveted in the region showed that there had been another route of literate culture directly from Setouchi Area during Nara Era. As for the spread of 'bokusho-tojiki'(ceramiccs with ink inscriptions)in the late ancient times, those found in Amami Islands suggest a sub route directly form southern China besids the main route via Hakata.Lastly,the fact that a huge amout of 'ten-yoken' were excavated at ruins of 'kokufu,' capital of ancient provinses, has revealed that literate practices was active in those days.

研究分野：日本古代史

キーワード：出土文字資料　墨書土器　文字文化　陶硯　転用硯

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

文献史料が限られる日本古代史では、木簡や墨書土器（ヘラ書土器・線刻土器を含む）などの出土文字資料の重要性が広く認められている。しかしこれまでの研究には地域的な偏りがある。木簡の研究は、出土の質・量とも他の地域を圧倒する飛鳥・藤原京、平城京など宮都が中心であり、また墨書土器の研究は、やはり出土量の多い関東・東国地域を中心に進められてきた。東国において墨書土器の出土量が多いこと自体、検討されるべき課題のひとつである。そしてこれまでの研究のなかで、東国の集落遺跡における墨書土器の広がりは、必ずしも識字の広がりを意味しないという重要な指摘がなされてきた。

九州では、木簡の出土は大宰府およびその周辺において集中して見られる。しかし筑前国を除くと他の地域での出土は僅少もしくは皆無であるため、地域における文字文化の広がりを検討するに古代木簡は十分な素材となりえない現状にある。とりわけ九州南部（日向国・薩摩国・大隅国）では、釈読できる木簡が京田遺跡出土の１点にとどまっている。また漆紙文書も筑前国でしか見つかっておらず、いずれも文字文化を広域に検討することができない。

いっぽう土中で分解されない墨書土器は、九州全域において、旧国単位で数百点から数千点が出土している。九州南部の日向国においても約 800 点、薩摩国で約 1200 点、大隅国で約 900 点をすでに集成している。ただし前述のように、集落遺跡での墨書土器の出土は、必ずしも識字の広がりを意味しない場合があり、文字文化の伝播を墨書土器だけで解明することには限界がある。

そこで土器と同じく土中で分解されない陶硯および土器の坏蓋・坏身を硯に転用した転用硯に着目し、これらを合わせて調査検討することを通して、地方への文字文化の伝播の様相を考察することにした。

２．研究の目的

本研究は、九州をフィールドの中心に据えつつ、古代の地方社会への文字文化の伝播とその具体相を明らかにすることを目的とした。

古代社会の識字層には、文字使用について大きな能力の幅が想定されるが、本研究では漢詩文を綴るような高い教養人ではなく、地方の官衙を支えた中下級役人層や集落の様相を対象とする。とりわけ日向国・薩摩国・大隅国といった、古代日本の西南の「辺境」における文字文化の伝播の具体的様相を明らかにしていく。

３．研究の方法

歴史学では資料の集成自体が重要な基礎的研究である。そこで日向国・薩摩国・大隅国における出土文字資料の集成を、研究協力者の協力を得て進めた。墨書土器については遺跡名・所在地・遺跡の特徴をまとめ、１点ずつ釈読文・記載方法（墨書・朱書・ヘラ書・線刻）・器種（須恵器・土師器、坏・碗・皿・蓋など）・記載部位と方向（底部外面・体部外面・蓋外面などと、正位・倒位・横位など）・時期・出土遺構・実測図（もしくは写真）を収集し、表形式のデータを作成する。なお陶硯・転用硯については、ルーペを用いて墨・朱墨の有無から使用痕跡の有無を確認する。日向国ではこれまでに摩擦痕のみで墨を確認できない、すなわち未使用の硯や転用硯が確認されているためである。

また文字文化の伝播の具体例を検討するため、日向国に持ち込まれたとみられる陶硯のルーツを検討する。

さらに日本列島の古代社会に墨書土器という文化が広がった経緯を解明するため、中国の墨書陶磁器との比較検討を意識して調査を進める。特に墨書土器の始まりの際と、平安期以降の陶磁器への墨書については、中国とのかかわりが想定される。後者の墨書陶磁器は、数量としては福岡市博多遺跡群が圧倒的に多いが、九州では全域にみられ、そのなかから伝播のルートを検討できるものを分析する。

４．研究成果

（１）日向国では、日向国庁跡（寺崎遺跡）を除いて新たに 16 遺跡から 112 点の墨書土器・転用硯、3 点の定型硯（円面硯・中空円面硯）を集成した。日向国庁跡では、研究協力者である津曲大祐氏（宮崎県西都市教育委員会）の協力を得て、新たに 6 点の墨書・ヘラ書土器、9 点の定型硯（円面硯・風字硯）、252 点の転用硯・墨溜めを集成した。地方官衙においては定型硯より圧倒的に多くの転用硯が用いられていたこと、日向国のような辺境の国府においても活発な文書作成・書記活動が行なわれていたことが判明した。日向国庁跡では墨書土器すなわち書かれた文字資料より、硯・転用硯といった文房具の出土量が圧倒的に多く、文字文化の広がりと書記活動を考察するうえで転用硯を検討することの有効性が確認できた。

薩摩国と大隅国については、研究協力者である永山修一氏（ラ・サール学園）の協力を得て、新たに薩摩国では 9 遺跡から 74 点、大隅国では 17 遺跡から 201 点の、広義の墨書土器を集成した。

これらの新しい集成資料は、「日向国出土墨書土器集成・補遺(4)」「薩摩国出土古代墨書土器集成・補遺(2)」「大隅国出土古代墨書土器集成・補遺(1)」として研究成果報告書収載し、印刷製本して国立国会図書館をはじめ学界関係者に配付した。

（２）九州南部の 3 か国における定型硯の出土量は、肥後国・豊後国以北にくらべて圧倒的に少ない。宮崎県内では日向国庁跡出土例を除くと、定型硯は 5 遺跡 6 点が知られるにすぎない。このなかには郡家に関連すると推定される遺跡や須恵器生産にかかわる工房と推定される遺跡を含む。このような状況下で、宮崎県高鍋町の下耳切第 3 遺跡では、奈良時代の竪穴住居跡から圏脚円面硯が出土している。下耳切第 3 遺跡は、宮崎平野北部を東流する小丸川左岸に広がる台地縁辺に所在し、古墳時代終末期から奈良時代に至る複合遺跡である。古墳時代終末期の円墳 2 基、地下式横穴墓 8 基、馬埋葬土坑の存在などから、小地域の有力者の存在が推定されている。

この圏脚円面硯の形態は、宮崎県内に類例がなく、搬入品であることは明らかであった。そこでその出自を各方面に探った結果、愛媛県松山市樽見四反地遺跡で極めて類似性の高い資料を見出すことができた。松山市内には硯を焼成した須恵器窯が複数確認されている。また脚端部の形状の特徴としては、広島市・岡山市・坂出市においても類例を見出している。これらから、下耳切第 3 遺跡出土の円面硯の故地は、西部瀬戸内地域、とりわけ伊予・松山である可能性が高いことが判明した。

古代西海道諸国において先進文物・文化は、一般に大宰府を経由してもたらされると考えられているが、本例のように瀬戸内から直接、日向国の小有力者にもたらされた文物もあった。奈良時代における郷長クラスが想定される。この事例は、文字文化の伝播ルートを検討するうえで、大宰府以外を経由したルートを今後も考慮する必要性を再確認させるものである。なおこの成果は、研究協力者である今塩屋毅行氏（宮崎県埋蔵文化財センター）により「宮崎県下耳切第 3 遺跡出土の円面硯」の論考にまとめ、研究成果報告書に収録、公表した。

（３）鹿児島県大島郡瀬戸内町与路島において、底部外面に「荘綱」墨書のある白磁碗が表面採集されていたことを確認した。古代末期の墨書陶磁器の出土は福岡市博多遺跡群が著名で、そこでは「綱」墨書も多数知られている。従来、九州各地で出土している墨書陶磁器については、対外貿易の拠点であった博多を経由してもたらされたものと考えられていたが、与路島は明らかに中国から博多へ向かう航路上に位置しており、中国から直接もたらされたものと考えられる。この資料については、研究協力者の永山修一氏により「出土文字資料二題の論考にまとめ、研究成果報告書に収録し、公表した。

また熊本市二本木遺跡においても「綱司」墨書のある白磁が出土していることを確認した。二本木遺跡は有明海につながる立地で、越州窯青磁をはじめ多数の輸入磁器が出土しており、古代末期に博多を経由しない、直接的な中国との貿易と、そこでの陶磁器への墨書の文化の伝播がありえたと想定される遺跡である。

長崎県大村市の竹松遺跡においても、数点の古代の墨書・ヘラ書土器のほか、五代十国時代の越州窯青磁Ⅲ類が出土している。古代末期の文化伝播のメインルートが博多経由であることは明らかだが、そのほかのルートもあったことがうかがわれ、今後のさらなる検討が必要であることが確認できた。

また中国大陸における墨書陶磁器を調査する機会を得た。寺院においては墨書のある陶磁器がしばしばみられること、唐代 8 世紀の洛陽においてヘラ書のある赤焼き土器が複数あることなどを実見した。いずれも日本からの遣唐使が見た可能性のある遺物であり、日本における墨書・ヘラ書土器の盛行とのかかわりも想定され、今後の検討が必要と考えている。

（４）上記のほか、研究協力者から以下の研究成果を得た。

〔学会発表〕

・今塩屋毅行「土師器について（塩見川流域）」、宮崎考古学会、2018 年

・永山修一、「文献から見た南九州における律令制の展開」、一般社団法人日本考古学協会 2017 宮崎大会、2017 年

・今塩屋毅行、「日向における律令期の集落と土器」、一般社団法人日本考古学協会 2017 宮崎大会、2017 年

・津曲大祐、「日向国府跡の調査成果」、一般社団法人日本考古学協会 2017 宮崎大会、2017 年

・今塩屋毅行「日向国における奈良時代の土器相―宮崎県西都市宮ノ東遺跡の調査事例から―」、宮崎考古学会、2016 年

〔図書〕

・永山修一『本庄古墳群猪塚とその出土品の行方　天明・寛政期薩摩藩の知のネットワーク』鉱脈社、2018 年、総 281 ページ

・永山修一ほか（共著）『古代文学と隣接諸学１　古代日本と興亡の東アジア』竹林舎、2018 年、総 559 ページ（535－556 ページを執筆）

・永山修一、他、（共著）、『西都市史　通史編　上巻』西都市、2016 年、総 648 ページ（164－206 ページを執筆）

・今塩屋毅行、他、（共著）、『西都市史　通史編　上巻』西都市、2016 年、総 648 ページ（99－102 ページを執筆）

・津曲大祐、他、（共著）、『西都市史　通史編　上巻』西都市、2016 年、総 648 ページ（95－99、229－237、245－248 ページを執筆）

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計２件）
①柴田子博子、８・９世紀の日向、『宮崎産業経営大学研究紀要』、査読無、29 巻 1 号、2018 年、23－24 ページ
②柴田博子、宮崎県大島畠田遺跡をめぐる一考察、『宮崎産業経営大学研究紀要』、査読無、28 巻 2 号、2018 年、25－38 ページ

〔学会発表〕（計４件）
①柴田博子、竹松遺跡の出土文字資料、歴史学研究会第 46 回古代史サマーセミナー、2018 年
②柴田博子、九州南部の出土文字資料、一般社団法人日本考古学協会 2017 宮崎大会、2017 年
③柴田博子、古代の役人と文字、九州歴史資料館第 37 回企画展記念講演会（招待講演）、2016 年
④柴田博子、宮崎県出土考古資料にみる文字、西都原考古博物館（招待講演）、2015 年

〔図書〕（計３件）
①柴田博子、永山修一、今塩屋毅行、津曲大祐（共著）『日向国出土墨書土器集成・補遺（４）薩摩国出土古代墨書土器集成・補遺（２）　大隅国出土古代墨書土器集成・補遺（１）』平成 27～30 年度科学研究費補助金研究成果報告書、2018 年、総 128 ページ（１－62 ページを執筆）
②柴田博子、他、（共著）『生活と文化の歴史学　８　自然災害と疫病』、竹林舎、2017 年、総 496 ページ（374－404 ページを執筆）
③柴田博子　他、（共著）、『西都市史　通史編　上巻』西都市、2016 年、総 648 ページ（207－229 ページ、237－245 ページ、248－266 ページを執筆）

〔産業財産権〕
　該当なし。

〔その他〕
　該当なし。

６．研究組織

(1)研究分担者
　該当なし。

(2)研究協力者
研究協力者氏名：永山　修一
ローマ字氏名：NAGAYAMA Shuichi

研究協力者氏名：今塩屋　毅行
ローマ字氏名：IMASHIOYA Takeyuki

研究協力者氏名：津曲　大祐
ローマ字氏名：TSUMAGARI Daisuke

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。